

タイトル	観光者の景観と居住者の景観
著者	水野, 邦彦; MIZUNO, Kunihiko
引用	開発論集(98): 1-9
発行日	2016-09-30

観光者の景観と居住者の景観

水 野 邦 彦*

はじめに

いずれかの地を観光に訪れる者は、その地の四囲を眺め、街を歩き、さまざまな店に寄り、名物とみられる食事をためし、湯に浸かり、その地の人々と話を交わすであろう。観光者はときとして道に迷いながらも、訪れた地の街並みや四囲の姿を新鮮な気持ちで受けとめるだろうが、その地に暮らす居住者は街並みや四囲の姿をどのように受けとめているであろうか。観光者の目に映る街並みや四囲の姿と、居住者の目に映る街並みや四囲の姿とは、同じであろうか。

これは景観が、観光者にたいしてはどのように立ちあらわれ、居住者にたいしてはどのように立ちあらわれるのか、という問いであり、この問いをめぐる景観の考察をこころみるのが本稿の課題である。

I. 景 と 観

人がその地の四囲を眺めるさい、四囲の姿はどのように目に映るのだろうか。現象的に人が、たとえば村落・田畑・山林・河川のような、空間的にはっきりと区分された種々の生態系が特徴的な排列をなす単位で四囲の姿

をとらえているとして、こうした単位を〈つくり〉configuration とよび、〈つくり〉を主要構成要素とする全体を景観とよぶことができる¹⁾。

景観はまぎれもなく四囲の姿の全体である。すくなくとも景観は全体を背景とし前提して成り立っている。このことは景観が任意の一部分だけで構成されるものでないことを意味する。

〈つくり〉やその全体たる景観の受けとめられかたは一樣でないだろうが、受けとめられかたの相違はいかにして生ずるのか。そもそも景観はまったき客観性をそなえているのだろうか。みえる対象である「景」と、みる主体である「観」とが結合してできるのが景観であり、景観とは、美しい景地とそれをみる人との相互作用のうちに成立する概念であると造景学者の申相燮はいう²⁾。景観はこうしてたんに客観的な存在ではなく、主観的な人間の意識とあいまって、はじめて成り立つ。

1) 逆にいえば景観のなかでくりかえしあらわれる単位が〈つくり〉である。李道元『伝統村落景観要素の生態的意味』ソウル大学校出版部〔韓国〕2004年、11-12頁をみよ。

2) 申相燮『韓国の伝統的な村と文化景観をもとめて』大家〔韓国〕2007年、12頁をみよ。

* (みずの く に ひ こ) 開発研究所研究員, 北海学園大学経済学部教授

みる主体=「観」が景観を構成し、みられる客体=「景」が景観の要素をなすかぎり、「観」が影響をあたえる主体であり「景」が影響を受ける客体であるとみられるが、しかしこの主体-客体関係は固定したものでなく、変わりを。地域共同体の環境特性がそこに暮らす人々の認識にくりかえし作用をおよぼし、その作用を受けた認識が人々の記憶にしみこみ、この認識が人々の景観にたいする価値基準となる³⁾。

ここで「観」として取りあげられているのは、地域共同体に暮らす人々であり、居住者である。それでは観光者は、景観にかんする主体として、居住者と同じに語りうるだろうか。便宜的ながら、まず居住者の場合、つづいて観光者の場合を順次みてゆこう。

II. 居住者の目に映る景観

景観は一方で自然的で文化的な特徴を有し、他方で各人にとっての意味を有するとエドワード=レルフはいう。「物理的な背景に意味をあたえる一連の特定な人格的で文化的な構えや意図」が景観の把握において不可欠であり、「それらの景観をなぜ、いかにして私たちが知るのかに由来する意味が、景観にはつねに吹きこまれている」ことを、レルフは論ずる。たしかに居住者がふだん自覚的に景観を意識することは稀であり、景観にたいする居住者の意識は「拡散しており集中性がない」し、「たいていの場合、私たちは景観にほとん

ど関心をもたない」ともいいうる。けれども例外的に「ある特定の背景が、その姿やそれにたいする私たちの好みのゆえに、習慣化した経験に不意の断絶をあたえるほどに深く私たちの意識に入りこむ」ことを私たちは経験する。それは、よろこび・忘我・周囲との一体感・完璧というような感情をもたらしうる「最高潮の経験」であり「トポフィリア」ともよばれるが、この「最高潮の経験」は当人にとって固有の経験であり、「最高潮の経験」を可能ならしめた景観は当人にとって固有の景観である。このときの景観は客観的なものではありえず、当人に固有の〈意味〉が附与される景観、当人にとって〈かけがえのない〉景観である。

こうして出会う〈かけがえのない〉景観は、その人に固有の意味をもつものであり、個別的景観である。ここには景観と生身の人間とのかかわり、その人のアイデンティティの要素をなす景観が示されており、「景観の主観的経験」というレルフの言葉もこのことを指すであろう。これと対比されるのが「あらゆる社会経済的階級の要求に応えなければならない」景観、「じゅうぶんに楽しめて心地よい」没感情的景観である。この景観はまるで「私たちとは距離があり無関係な」ところにあるもの、「私たち自身の経験が順応しない景観」、「個人的・共同体的傾向を助長することのない」景観である。それをレルフは「均質化された be levelled」景観、「公共的景観」とよぶ⁴⁾。均質化された景観が大衆社会化と歩みをともして形成されてきたものであろうこ

3) 権ジノ「韓国の原型的景観と山」李道元ほか編『韓国の伝統生態学 2』サイエンスブックス〔韓国〕2008年、55-56頁をみよ。

4) See, Edward Relph, *Place and Placelessness*, London, 1976, pp.122-127.

とは容易に想像がつくし、あわせて、古代ギリシャを範とする公的世界が近代化過程で大衆社会化の煽りを受け公的性質を喪失してきたことを指摘するハンナ=アーレントの叙述が想起される⁵⁾。大衆社会においては、ひとりひとりの存在が固有性をうしない、均質的なもの、他に代替されうるものに貶められるのと同様に、人々のアイデンティティの要素をなす〈かけがえのない〉景観もまた均質化される。

ことはたんなる景観にとどまらず、人間と土地との結びつきいかにかわる。居住地の景観が固有性をうしない均質化されることは、その地の居住者の暮らしが均質化され、世界観が均質化され、情緒が均質化されることを意味する。大衆化された現代社会において居住者が「景観にほとんど関心をもたない」日常に埋没しているかぎり、このような均質化は避けられないであろう。それだからこそ「ある特定の背景が……習慣化した経験に不意の断絶をあたえるほどに深く私たちの意識に入りこむ」経験が大きな意味をもつ。習慣化した日常に「不意の断絶をあたえるほどに深く私たちの意識に入りこむ」経験には、文字どおり〈不意の断絶〉が不可欠といえる。それでは、なにが〈不意の断絶〉を生ぜしめるか。まず思い浮かぶのが非日常の経験であり、そのひとつに、他の地の訪問が考えられる。すなわち旅行であり観光である。

III. 観光者の目に映る景観

観光者が接する景観には、日常的な居住地の経験に〈不意の断絶〉をもたらし側面と、見知らぬ地をものめずらしく見聞して歩く側面とがみとめられるであろう。

第一の、日常的な居住地の経験に〈不意の断絶〉をもたらし側面は、観光地での見聞を鏡として、みずからの居住地がいかなる地であるかを見直すことといえる。それは、他の地との比較対照をとおして、みずからの居住地の固有性や特性を把握することである。これによって人は、習慣化された日常に埋没しているかぎりは気づかずにやりすごしてしまう居住地の固有性や特性を思い知らされる。いいかえれば、居住地にたいする従来の見方が変化し、知り尽くしていたはずの居住地についてあらたな発見がなされるのである。これは人が居住地の景観に「物理的背景に意味をあたえる一連の特定な人格的で文化的な構えや意図」をみだし、レルフのいう「習慣化した経験に不意の断絶をあたえるほどに深く私たちの意識に入りこむ」経験になりうる。こうして観光地での見聞は、みずからの居住地をふりかえる意味を有する。

第二の、見知らぬ地をものめずらしく見聞して歩く側面は、観光ないし旅行という言葉聞いてだれもが思い浮かべる観光者の姿であろう。このときの観光者には「気楽に生活をためしてみる観光客 sightseers という特殊で支えのない存在」⁶⁾、「離れたところから街を見物する」観光者という印象がついてま

5) Vgl. Hannah Arendt, *Vita activa oder Vom tätigen Leben*, Stuttgart, 1960.

6) Yi-fu Tuan, *Space and Place: The Perspective of Experience*, Minneapolis, 2014, p.146.

わる。ある土地、ある場所について、居住者が内側の存在であるのにたいして観光者は外側の存在であり、居住者がその場所を「経験する experience」のにたいして観光者はその場所を「見物する look upon」。居住者が「場所の内部」になり「場所に属する」のにたいし、場所の外部に立って眺める観光者は〈よそ者〉にすぎず、そこに属することはない。

「内部にいるとは自分がどこにいるのかを知っていることである」が、外部にいる観光者はその地に自分の居場所をみいだせない⁷⁾。

内側に存在する居住者は「意味のある場所で満たされた世界に暮らしている」「あなたの場所を有し知っている」という意味で「人間的 human」であり、居住者が暮らす人間的な世界は「生きられた世界 the lived-world」とみなされる⁸⁾。この居住者にあたえられうる「生きられた世界」「生きられた空間の経験 experiences of lived-space」を、観光者は享受しえない。観光者は「内部の姿と構造と中身」にふれることができない。このような立場にある観光者は「あらゆる場所から深く疎外されていることを意味する」といわざるをえず、その目に映る景観はおのずと制約を受けることになる⁹⁾。

いずれかの景観に特定のアイデンティティが形づくられるとしても、それは客観的な構成要素に帰せられるわけではない。「アイデン

ティティは内部性の特殊な性質であり、空間のなかから場所を取りだす内部的存在の経験である」¹⁰⁾とレルフはいう。つまり、いずれかの地、いずれかの景観のアイデンティティは、「内側にいる」経験によってこそ成り立つのであり、「外側」にあつて〈よそ者〉の地位に甘んじなければならない観光者には、当人に固有の〈意味〉が附与された〈かけがえのない〉景観、「景観の主観的経験」があたえられないことになる。

では観光者はどのように景観をみるのであろうか。レルフは、観光者がその地の環境にほとんど目を向けずただガイドブックの記載にそってつぎの目的地へと急ぐだけで「その場所を経験しない」こと、観光者にとっては「訪れる場所以上に観光 tourism の行為と方法とがいっそう重要になる」ことを指摘しており、トゥアンもまた観光者は訪れる地について「ガイドブックで読んでいる」だけで「現実の重みを缺く」としるしている¹¹⁾。「旅行 travel の目的が、固有で多様な場所を経験することより、それらの場所を(とりわけフィルムで)集めることにある」かぎり、旅行ないし観光は訪れた先の景観や自然や街並みを経験することにはならないであろう。観光者には「感情移入的に場所の内部になること」「場所を意味に満ちたものとして理解すること」「場所と一体化すること」がない。すなわち観光者はそこで「場所が呼びかけているにちがいないあらゆるもの」にたいして自分の感覚をひらき「まわりにあるすべての雰囲気

7) See, Edward Relph, *Place and Placelessness*, p.49.

8) See, Edward Relph, *Place and Placelessness*, pp.1, 6.

9) See, Edward Relph, *Place and Placelessness*, pp.49-53.

10) See, Edward Relph, *Place and Placelessness*, pp.8.

11) See, Edward Relph, *Place and Placelessness*, pp.83, 85; Yi-fu Tuan, *Space and Place*, p.18.

感じ」「その場所の空気を吸い、その場所の音を聴き」「場所のアイデンティティの本質的要素を察知し」はしない¹²⁾。

さらにレルフは「世界にたいする開放性と人間の条件にたいする自覚性」からなる「真正性」と、「世界と人間の可能性とにたいして閉じられた態度」である「非真正性」とを峻別し、非真正性は観光においてもっともはつきりあらわれるとする。非真正性は、景観と人間とが〈uncommitted〉である（かかわりをもたない）ところに起こる現象であり、そのさいの景観は〈場所〉的性質をうしなった「没場所性 placelessness」に陥る¹³⁾。没場所性についてレルフはつぎのように規定する。

没場所性が示すのは、意味深い場所をもたない環境と、場所のうちに意味をみとめないひそかな姿勢との両方である。没場所性は場所のもっとも深い水準にまでいたるが、そのさい根を断ち、象徴を浸蝕し、多様性を均一性に取り換え、経験的秩序を概念的秩序に取り換える¹⁴⁾。

観光者の目に映る景観は、その地の意義が切り離された景観、根なしの景観と考えられる。

見知らぬ地をものめずらしく見聞して歩くという、観光者の目に映る景観の第二の側面は、ひとまずこのようにとらえられる。

IV. 〈小ざれい〉な均質化

前節では観光者が接する景観について、あまり肯定的でない第二の受けとめかたに重きが置かれた。けれども観光地の景観が「習慣化した経験に不意の断絶をあたえるほどに深く私たちの意識に入りこむ」経験はじゅうぶん考えられるし、観光地での見聞がみずからの居住地をふりかえる契機となり鏡となる可能性はあなどれない。第II節冒頭でふれた「ある特定の背景が……習慣化した経験に不意の断絶をあたえるほどに深く私たちの意識に入りこむ」経験、よろこび・忘我・周囲との一体感・完璧というような感情をもたらしうる「最高潮の経験」は、居住者にかぎられるものではなく、観光者にも可能な経験であるといえるだろう。「そのときどきに私たちがみつけるものを受け入れる」態度が観光者には原理的に閉ざされているとはいいいがたい¹⁵⁾。それでは、いかなる場合に観光者は不意の断絶を引き起こし「最高潮の経験」をなしうるか。そもそも「最高潮の経験」はいかなる人に、いかなるときに、いかなるところで起こるのか。

長野県松本市は四方を山に囲まれた大きな盆地である。上京した松本市出身者が東京でほとんど山がみられないことを寂しがるのはよく聞く話である。松本の居住者にとって山の姿はあたりまえであり、山がない空間には違和感を覚える人々が多いという。松本の人々が日ごろ意識しているわけではないだろうが、山は松本の景観を構成する要素として、

12) See, Edward Relph, *Place and Placelessness*, pp.54, 85.

13) See, Edward Relph, *Place and Placelessness*, pp.80, 83, 143.

14) Edward Relph, *Place and Placelessness*, p.143.

15) See, Edward Relph, *Place and Placelessness*, pp.90, 123.

すなわち〈つくり〉として、不可欠であるといえる。とりわけ松本市西方には常念岳・奥穂高岳など錚々たる日本アルプス（北アルプス）の山々が並んでいる。「信州まつもと空港発着の飛行機内からは、雪に輝く日本アルプスのすばらしい山景が見られることと思います」とは、松本市美術館副館長の言である。

^{やまなみ}山脈と並んで松本の景観の大きな構成要素をなすのは城下町という〈つくり〉である。城下町であるかぎり城は街の中心ないし拠点であるといえるだろうが、とくに近代以降は城のみならず商店街・食堂街も大きな存在感を有し、じっさい商店街や食堂街は人々を吸引する効果を発揮している。この意味合いを汲んでいえば、松本城・女鳥羽川・ナワテ通り・中町通りの気配を束ねるかのような千歳橋附近に、こんにち松本の街の中心点があるともいえるだろう。

もともとナワテ通りは、敗戦後の闇市の気配が漂っていたといわれるが、自動車が侵入できず、問口の小さい各種店舗が軒を連ねる庶民的な通りであった。中町通りは昔ながらの蔵がそこここに並んで風情があったものの、とりたてて人目を引くほどの通りではなかった。ナワテ通りも中町通りも、おそらくは観光地=松本の街づくり事業の一環として、この30年〜40年のあいだに整備されて〈小ざれい〉な通りになった。今日のナワテ通りは、しゃれた古道具店・土産物店が並び、数多くの観光客がひきもきらず訪れる通りになっている。中町通りでは、白と黒のなまこ壁が特徴的な蔵がいくつもみられ、散策する観光客の姿がすくなく見受けられる。

〈小ざれい〉になったことは、かつての土着的庶民性、あるいは薄汚ないともみえる雰

気が、一掃されたことを意味する。土着的庶民性は、居住者によって、居住者のために生みだされたもので、基本的に観光客がそこに入りこむことはない。土着的庶民性を帯びた通りが〈小ざれい〉な通りに変貌したことは、たしかに居住者にとっても喜ばしいことであろうが、そこで観光客の来訪がさうとう意識されていることは想像に難くない。「中町通りはいま松本でいちばんきれいなところだ」と50代の松本市民は語っていたが、「きれいなところ」になったぶん中町通りから土着的庶民性は薄らいでいったであろう。

その地に長く住みついている人にとって街が〈小ざれい〉になることは、それ以前の土着的庶民性を帯びた街の記憶と印象がつくりかえられることである。街の景観に向ける居住者のまなざしは不変であるわけではない。観光客の存在が大きな原動力となって街が〈小ざれい〉になったとすれば、観光客の目に映る景観の意味が、居住者の目に映る景観の意味を変容させたことになる。この変容は、薄汚ないとみられかねない土着的庶民性を弱めることであった。土着的庶民性は、その地に住まう人々の暮らしのなかから滲み出てきた性質であり、固有で実存的な性質である。この固有性もしくは個別の実存を弱め、観光客に幅広く好印象をあたえる一般性・「均一性」を前面に出すのが、街の現代的な変貌である。ナワテ通りも中町通りもその例外でなかったようである。

あるいは、かつてその地に住んでおりのちに他の地に移住し、久しい期間を経て昔の居住地を訪れた人は、より明確な感慨をいだくかもしれない。数十年ぶりにみる街はずいぶん〈小ざれい〉になっており、その街にかん

するみずからの記憶が洗浄され美化されて、昔からこれほどきれいな街であったかと錯覚することもありうる。この洗浄美化の過程で、しばしば薄汚なさをともなう土着的庶民性は知らず知らずに削ぎ落とされる。一般的に街が〈小ざれい〉になることは歓迎すべきことであろうが、それは居住者の目に映る景観に修正が加えられ、しかも居住者が修正された景観に慣れ、記憶にも変容が生ずることである。

これは第Ⅱ節でみた「あらゆる社会経済的階級の要求に応えなければならない」景観、「じゅうぶんに楽しめて心地よい」没感情的景観が形成される過程を示唆するであろう。それは、その地の居住者の暮らしが均質化され、世界観が均質化され、情緒が均質化されること、「私たちとは距離があり無関係な」景観、「均質化された」景観が出現することを意味する。

このことを否定するにはおよばないとする見解もありうる。坂口安吾は1942年につぎのように書きしるしている。

……多くの日本人は、故郷の古い姿が破壊されて、欧米風な建物が出現するたびに、悲しみよりも、むしろ喜びを感じる。新しい交通機関も必要だし、エレベーターも必要だ。伝統の美だの日本本来の姿などというものよりも、より便利な生活が必要なのである。京都の寺や奈良の仏像が全滅しても困らないが、電車が動かなくては困るのだ。我々に大切なのは「生活の必要」だけで、古代文化が全滅しても、生活は亡びず、生活自体が亡びない限り、我々の独自性は健康なのである。なぜなら、我々自体

の必要と、必要に応じた欲求を失わないからである¹⁶⁾。

これは、街の土着的庶民性を薄めて〈小ざれい〉にし均質化することを訴えるものではないが、「便利な生活」「生活の必要」の優先順位を高めつつ、いたずらに「伝統の美」「日本本来の姿」を墨守することを批判する一節である。この伝でゆけば、街の土着的庶民性が薄められ街が〈小ざれい〉になることは歓迎されるであろう。ここに直截的に他の地が視野に入っているわけではないが、全国的に街の均質化がすすむことも意に介さない姿勢が窺える。

坂口安吾の論調は、生身の人間の生きざまに根ざしてものを考えるところにあるといえる。生身の人間の生きざまと切り離されたところで文化だの伝統だのを語ることの無意味、それどころか負の価値を、安吾は嫌悪するようにみえる。

V. 「最高潮の経験」

さきにみたレルフの「生きられた世界」「生きられた空間の経験」「景観の主観的経験」「アイデンティティ」「真正性」、トゥアンの「現実の重み」は、煎じ詰めれば人間自身の姿、自己自身のありかた、人間の生きざま、人間の自己意識を指しているのではないか。「真正」なる景観とは、こうした自己自身の姿が投影され視覚化されたものではないか。だか

16) 坂口安吾「日本文化私観」『太宰治・坂口安吾集』〔現代日本文学大系 77〕筑摩書房、1969年、363頁。

からこそ景観と人間との〈uncommitted〉は「非真正性」を意味し、その景観は「没場所性」に陥るのである。根なしの景観とは、まさに自己自身の生きざまに根ざしていない場所、自分とかかわらない（uncommitted）場所の視覚的表現たる景観なのである。

自己自身のありかた、人間の生きざまが、その地に溶けこんでおり染みこんでいることが、おそらく論点の核心である。自己自身の暮らしや生きざまがその地と溶けあっていることが実感され感覚的に把握できれば、景観は生き生きした（lebendig）ものになる。このように、景観など外部の対象に自己を実感する経験が、レルフのいう「最高潮の経験」にあたるようにもみえる。

景観は、ふだんは意識されない人間の生の粹といえる。自己自身であれ他者であれ、人間が投影された姿が景観のうちに感じられ読みとられるか否かが、景観の真正性・非真正性の岐路になる。居住者の目に映る景観において「最高潮の経験」が得られるのは、自己自身の暮らしが投影されている場合であろう。他方、観光で訪れた地で自己自身の暮らしが投影された景観をみることはできないから、観光者の目に映る景観において「最高潮の経験」が得られるとすれば、その景観は当地の居住者の暮らしが投影されたものであろうことを推測しつつ、もしくは、この地で暮らしている自分を想像しつつ、景観のうちに人間の生きざまを感じとる場合であろう。このような推論が成り立つのであれば、居住者でも観光者でも景観にそくした「最高潮の経験」が可能になるはずである。

岡山県玉野市は、岡山市から南方に小1時間ほど走る鉄道の終着=宇野駅をひとつの基

点として形成された街である。玉野市の人口は約6万5000人であるが、宇野の街は商店街がさほど大規模でなく、しかも商店街と住宅街とが入り交ざっており、街のだいたいの広がり南北に歩いて30分～40分ほどである。街の南には港、東にも海、北西には山があり、平板な地形ではない。2軒の書店のほかに、「貸本並びに古書籍販売」というかすれ気味の看板を掲げた店があり、店内の古典的な木製本棚にはいくらか埃をかぶった古書が詰まっていたが、引き戸を開けて中に入っても主人が出てくる気配はなかった。よきにつけ悪しきにつけ宇野の街には取りたてて観光者の目を引くものがあるわけではなく、世にいう観光地の体裁をなしてはいない。いいかえれば観光者向けに演出された景観はほとんどない。したがって宇野の街で目にする景観は「居住者の景観」の色彩が濃いいといえるだろう。

観光者が宇野の街を訪れたら、その景観をどのように感ずるだろうか。第Ⅲ節でみたような、観光者がその地の環境にほとんど目を向けずただガイドブックの記載にそってつぎの目的地へと急ぐだけという姿は、さいわい宇野の街ではみられないであろう。観光者の視野に入ってくる目立ったランドマークがあるわけでもなく、わりあい静かに穏やかに時間が流れる街の雰囲気を感じずるであろう。宇野の街の景観は、ひとえに宇野に暮らす人々の生きざまが映し出され投影された景観であり、そこに観光者が主体として入りこむ余地はほぼ残されていない。世にいう観光地の体裁をなしていないがゆえに、観光者の目に映る景観、観光者固有の景観は、成り立ちにくい。いきおい観光者の目に映る宇野

の景観は、居住者の景観に依拠するしかなくなる。

観光者が居住者の景観に依拠するとは、景観にたいする居住者のまなざしにそって観光者が当の景観をとらえることであり、それは居住者の感覚を想像し洞察しつつ追体験することでもある。この追体験は同時に、景観をとおして居住者の暮らしや生きざまを想像し洞察することであろう。あるいは、宇野の街に生まれ育った天才的な漫画家の感覚形成・人間形成に思いを馳せることであろう。街の景観をみて観光者は、居住者の生きざまを想像し、それをつうじて観光者自身の生きざまをふりかえるのである。そこに共鳴が成り立つとすれば「最高潮の経験」が得られる。

む す び

居住者が自己の居住地の景観にそくして「最高潮の経験」を味わうのは、自己自身の姿を反省的にとらえ、自己自身の生きざまを確証し、自己の半生をふりかえるときであろう。

観光者が訪れた観光地の景観にそくして「最高潮の経験」を味わうのは、その地に暮らす居住者たちの生きざまに思いを馳せ、共鳴し、そこに観光者みずからの生きざまを重ね合わせることができた場合であろう。これは、たんなる景観をめぐる共鳴や共感という

より、居住者と観光者との人間的共鳴・人間的共感ではないだろうか。レルフのいう「真正性」が「世界にたいする開放性と人間の条件にたいする自覚性」を意味し、「非真正性」が「世界と人間の可能性とにたいして閉じられた態度」を意味するということも、人間的共感が生まれるかどうかを問うているように読める。生まれ育った土地、いま現に暮らしている土地が異なっても、人間的感性において共通性を実感できれば、共鳴なり共感なりは成り立ちうる。これは、美を感じる趣味判断が普遍妥当性を有するというカントの理論に通ずる現象ではないか¹⁷⁾。

カントにちなんで書き添えれば、人はみずからの居住地以外の地を訪れる権利を有することをカントは18世紀末に主張し、人が旅に出てみずからの目で他の地の人々を知ろうとすること、その地の人々と交流をこころみることの意義を示唆している¹⁸⁾。

景観にたいする人間の態度のうちに、ふと私たちが他者の生きざま・互いの生きざまを直観的に洞察し、そこに共鳴なり共感なりをいただく姿をみいだすことができる。景観とは、そのような互いの洞察や共感の視覚的あらわれでありうるといえるだろう。

*興味深い話を聞かせてくださった長野県松本市のみなさん、岡山県玉野市のみなさんに、謝意を表する。

17) Vgl. Immanuel Kant, Kritik der Urteilskraft (3. Aufl., 1799), *Kant's gesammelte Schriften*, Bd. V, Berlin, 1908.

18) Immanuel Kant, Zum ewigen Frieden, *Kant's gesammelte Schriften*, Bd. VIII, Berlin, 1968, S. 357ff.